

大手 裕子(大阪成蹊大学芸術学部 教授)

今回の応募作には、全般にいつもの皆さんの思いのままの表現と、それに反して漂う周りを気づかわねばならない控え目な感情のせめぎ合いのようなものを感じました。全世界の全員が同じ困難に同じ願いを持って立ち向かっている今、HUG+展に集め皆さんにも本来の力強く自由な表現が思い切りできる日が近いことを願います。

岡 泰正(神戸市立小磯記念美術館・神戸ゆかりの美術館 館長)

作品から生きる力を与えられる。自分としては審査という目線ではなくパワーに圧倒されたものを推しているにすぎない。毎度のことながら自身の美のものさしが揺さぶられ、発見させられることばかりである。

《evolve》は、集中と余白のコントラストに宇宙、あるいはミクロの世界を見せられる思いがする。多くの出品作がコスミックなのはなぜなのだろう。自分としては色彩感のすぐれたものに強く魅かれる。《抱っこ・ねこ・ラッコ》は、そのひとつ。音楽のようなやすらかさが感じられる。《イルミネーション・カーニバル》には、今、目のかたきにされている密集の美しさがある。《キアシシギ》の色彩の強さにも共鳴させられた。

応募される方々は、今後も審査する者を驚かせる作品を産み出して欲しい。

岸本 吉弘(神戸大学国際人間科学部 教授)

多くの作品に表現する「楽しみ」や「喜び」が有り、それが本展の大きな特徴だといつも思っています。プロの表現者の多くが自身の形式や方法にこだわるがあまり、この当たり前の「楽しみ」や「喜び」を忘れがちです。皆さんの表現には、こうした素朴でありながらも本質的な魅力があるのです。どうか、こうした「良さ」に今後も更にこだわり、また伸ばし、また挑戦を続け、深めていって下さい。表現とは「冒険」です。表現とは「自己実現」であり、「あなたそのもの」のはずです。

服部 正(甲南大学文学部人間科学科 教授)

描くこと、作ることの楽しさ、喜びが伝わってくる作品が多く、見ている私も楽しい気分になりました。

いずれの作品も、ご自身の力や気持ちを精一杯に表現したもので、そのひたむきさに心を打たれます。それだけに入賞作品を選ぶという作業は心苦しさを伴うものでしたが、持てる力を存分に発揮し、表現したいという気持ちが特に強く作品に表れているものを選びさせていただきました。そのような強い気持ちは、そのまま作品に表れて、作り手の個性を感じさせてくれるものです。上手い下手ではなく、作りたい気持ちの強さを、これからもためらうことなく画材にぶつけてください。